

【執筆者の紹介】

大正十二年 三重県津市にて出生

昭和十六年 旧制中学校卒業

昭和十九年 関東綏陽第八六八部隊国境守備隊に配属

昭和二十年八月十五日 終戦を知らずして行動中にソ

連軍と交戦、多数の戦死者を

出す

九月 ビロビジャン收容所を経てロンド

ナーに移動

昭和二十二年六月 舞鶴港へ上陸、帰国

氏の執筆体験記を十二枚の水彩画に表現せし油絵

は、当時の惨状を語るにふさわしく、三重県津市での

シベリア抑留展に展示され、好評を得ました。

なお、現在、平成十一年に結成されました勸全抑協

愛知支部の役員として最大の御協力と御活躍をいただ

いております。

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留記

岐阜県 佐々木 博 夫

私たち三七五九部隊は、昭和二十(一九四五)年五
月ごろ東安から通化に移動した。八月十五日、部隊長
の命令で全員ラジオの前に集合せよとのことで、陛下
の玉音放送を聞き、その後涙を流しながら詳しく話さ
れた。この後どうなることか、全員ただぼう然とし
た。その後兵舎の使役で日を送る。その後何日かし
て、ついにソ連兵により武装解除。広場に兵器は山と
積まれた。部隊長の話では、我々はソ連の命によりウ
ラジオストックから日本に帰すとのことで、吉林大学
に集結することのこと。

吉林大学に来てみれば、先に来ている兵隊でいっば
いであった。何日かして切符の要らない貨車列車で着
いた所は黒河であった。船で河を渡り、ソ連に入る。
十月九日だったと思うが、忘れた。四十トンか五十ト

ンか知らないが満鉄の貨車より一回り大きいような気がした。二段棚にして何人乗ったか記憶はないが、相当詰め込まれた。もうだいたいウラジオストックに近づいただろうな、内地の話や色々話していたあるとき、誰かが、オーイ海が見えるぞと叫んだ。ある兵は、これは違うぞ、これはバイカル湖じゃないか。それでは反対方向だ。哀れ夢消されたか。何が東京ダモイだ、やはりソ連人だ、よくわかった。

引込線へ入っては停車一時間、二時間と繰り返し、二十五、六日はかかったと思う。ここで下車と言われた所がバルナウル。オビ川上流とのこと。赤レンガ作りの収容所。周囲を鉄条網と高い板塀で囲み、要所要所にやぐらが立ち、中に警備兵が自動小銃を抱いて監視している。中に入ると豆電球が所々に下がっている。また、ペーチカも所々にあった。蚕棚式で二段で寝ることができた。長旅の疲れと空腹で身も心もくたくたに疲れ果て夕食を待っていると、やがて出て来たものは小さな馬鈴薯二個が入った岩塩のスープ、これが夕食であった。その後、皮のついたアワの粥に黒

パン二百五十グラム一切れ、これでは生きて帰れるかとつくづく思った。

毎朝作業に出るとき、ソ連の兵が五列に並ばせ、アジン、ドヴァ、トリリーと数えていくが、前後の区別がわからなくなり、またやり直し、三十分も四十分もかった。零下三十度の中、足をバタバタさせながら、ヨポイマーチ（この馬鹿野郎）ヴィストラナーダ（早くやれ）とみんなで苦情タラタラ、毎朝の苦痛の時間であった。

二十一年十月ごろ、痔が出て歩くことに苦労したが、痔の患者はどんなに病状が悪化しても作業は休むことはできない。戦友から、石を焼き痔に当てると良くなると聞き、作業の帰りに石を持って帰り、ペーチカで焼き、当てた。気持ち良くなった。左手で当てて寝る。そのことかどうかは分からぬが、左手首から先がポンポンに腫れて痛かった。ソ連軍医者に見てもらったら、ニーハラシヨスパーチナーダ（良くないから休みなさい）とのこと。それから半月程度休むことができ、痔もよくなった。

オビ川船上の材木おろし、鉄道工事、石灰貨車おろし、金属工場作業、建築土木工事、レンガ工場作業。ダバイダバイ（早く早く）、ビストラ、ビストラの強制労働、死との背中合わせの毎日であった。

あるとき、工場のカルトウシカ（ジャガイモ）の選別に行ったとき、ニンジンを選別もせよとのこと。そのときニンジンを生で食べた。そのうまいこと。日本の柿のような味。食べた食べた。腹いっぱいいたいた。そしてジャガイモを帰りにズボンの中に入れて帰り、ペーチカで焼き、戦友達と分け食べた。みんな大変喜んでくれた。

二十二年三月頃になると、作業に行った所々でロシア人が、ヤボンスキースコラダモイ（近いうちに日本人兵隊は日本に帰る）と言うようになった。その頃から、民主化運動が盛んになってきた。皆が口を合わせるように共産主義が良いという事を言わないと早く帰れないというようになった。みんながその方向に進むようになった。カモフラージュである。

四月初め頃、ソ連将校と通訳で聞き取り調査が始

まった。私の番で、〇〇会社の労働者と言う。その後、何日かたったある日、ソ連将校より、今ここに集合した皆さんは東京へダモイだ、元気で帰るようにと話があった。みんなが、うわあ、スパシーボ、スパシーボと涙して歓声を上げた。

五月初めごろ、東京ダモイで貨車に乗せられ、ナホトカに着いた。ナホトカではあまり民主教育はなかった。五月上旬に待ちに待った乗船命令があり乗船できた。日本女性の方々より、皆さんご苦労さまでした。これで本当に日本に帰れるのだ。涙、涙、笑顔、感激の喜び、悪夢のようなシベリアより無事帰れた。船の名は恵山丸。二日目か二日半ぐらいだったか、あつ、島だ、島が見えるぞおーと声が上がった。みんな甲板に出る。見えた、見えました、夢に見た島だ。青々とした麦畑、葎茸屋根の家、木々の新芽、青一色の山々、緑がなんと素晴らしいことか。

米兵の二世に色々と調査を受け、京都、名古屋、中央線中津川に到着した。夜十一時頃、一人とほとほと駒場実家に着いた。家を出てから五年、そのままの家

だった。あまりの嬉しさに一芝居うとうと思ひ、玄関

の戸をトントン、トントンとたたく。中の方より誰かが何か用かと聞いてくる声があった。「すみません、一、

三日何も食べていないのですが、今夜一夜庭の隅をお借りできないでしょうか」「だめ、だめ、誰だ」と言

い、弟達が出て来た。あれ、兄ちゃんや、本当か、兄ちゃんやなと飛びついてきて、抱き合つて声を上げて

泣いた。父母も元気でいた。よう帰つてこれたな、父は神棚に灯明して長々と頭を下げている。みんなで朝

まで色々と話し合った。そして夢にまで見た米の御飯と母の料理を涙してかみしめた。

最後に、異国の地に永眠された数多くの皆様の御霊に心より冥福をお祈り申し上げます。

【執筆者の紹介】

佐々木氏は大正十年一月、十二人兄弟の長男として生を受け、昭和十八年五月、名古屋中部第八部隊に入隊の後、渡満。東安省、東安第三七五九部隊に所属、国境警備に従事。昭和二十年八月、終戦、シベリア抑

留。昭和二十二年五月、復員。

帰国後、出征前の会社、王子製紙に復職し、六十五歳で定年退職。

現在は元気な孫達にも恵まれ、近所の農家の休耕田を預かつて野菜作りに励み、幸福です、家族の笑顔が何よりの楽しみです、と淡々と語る彼の日焼けした顔が印象的でした。

中津川支部の会員として県連の行事には積極的に参加されており、貴重な人材です。

(岐阜県 鈴木 善三)

一兵士の虜行記

愛媛県 稲見 正

はじめに

私は、昭和十六(一九四一)年十二月八日、満州の北端、北緯五十一度を越す黒龍江の上流にある法別拉(ホウベラ)で大東亜戦争開戦の大詔を承り、昭和二